

(6) 尿失禁を有する高齢患者の排尿ケアに対する回復期リハビリテーション病棟看護師の認識

川崎医療福祉大学大学院 保健看護学専攻修士課程 ○鷺野 貴子

川崎医療福祉大学 保健看護学科 竹田 恵子

【要旨】

【目的】

尿失禁を有する高齢患者の排尿ケアに対する回復期リハビリテーション病棟（以下、回リハ）看護師の認識を、継続看護の視点から明らかにすることを目的とする。

【方法】

A県内の19施設の回リハに勤務する看護師を対象に、郵送法による無記名自記式質問紙調査を実施した。調査期間は平成25年7月～9月、調査内容は対象の属性、排尿ケアにおけるアセスメントの状況や退院支援の状況などであった。尚、調査は川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果及び考察】

395部配布し195名から回答があり（回収率49.4%）、有効回答は172名であった（有効回答率43.5%）。対象者の年齢は 39.7 ± 10.8 歳、看護師の経験年数は 16.2 ± 10 年であった。

アセスメントに使用する情報（複数回答）は、「尿

意の有無」170名（99.0%）、「排尿回数」153名（89.0%）、「現在の排尿方法」138名（80.2%）の順であった。また、排尿日誌の使用は、「よくある」54名（31.4%）、「少しある」64名（37.2%）であり、約7割が排尿ケアにおけるアセスメントの基盤となる排尿日誌を活用していた。しかし、活用目的（複数回答）は「頻尿があるとき」が96名（82.1%）と最も多く、「尿失禁があるとき」は65名（55.6%）であった。

家族への退院支援（複数回答）は、「現在病棟で行っている排尿の援助方法を指導している」160名（93%）、「家族の介護負担を考慮した排尿の援助方法の提案」139名（80.8%）であり、介護負担に目を向けていることが明らかになった。一方、居宅サービス事業所に対する情報の提供（複数回答）は、「現在の排尿方法」162名（94.2%）、「排尿行動に関する情報」135名（78.5%）、「膀胱機能に関する情報」127名（73.8%）であり、ケアの継続に向けた情報提供を行っていることが示された。